

源氏物語爪印：夕霧巻

著者	村井 利彦
雑誌名	山手国文論攷
号	12
ページ	1-10
発行年	1991-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000926/

源氏物語爪印 一タ霧巻一

村 井 利 彦

- 【1】「まめ人」夕霧が主役となる巻である。彼がよくその任にたえうるかどうか。ただし見ものである。
- 【2】夕霧の下心「かくてはやむまじくなむ」(11)をしっかりと書いておいて、その夕霧の「あはれにありがたき御心ばへ」(11)を信じて疑わぬ 善意の人御息所を書く。ということは、彼女はまもなく若菜巻の朱雀院になるのではないかと読者は予想して読むことができよう。
- 【3】物怪調伏のために小野にゆく。山籠もりして「里に出でじと誓ひたる」律師を麓まで呼ぶためである。こうすると、源氏物語終末部の場面に似てくる。作者は意識しているのだろうか。若紫巻・北山から手習巻・比叡山麓小野への流れ。
- 【4】下心のある、まめめしい夕霧の世話ぶり。薫への道がここに開かれる、というべきか。
- 【5】夕霧への礼状を病気の母が書けない。したがって落葉宮本人が書く。これがいいよ夕霧を刺激する。あやにくな展開である。
- 【6】雲居雁は、すでに夕霧の下心を読み切っている。彼女は髭黒大将元北の方になるのかもしれないという予測が成り立つ。
- 【7】狭い北山の旅の住居が宮と夕霧を近接させる。夕霧の心は空になる(15)。ものみな運命的な展開配置である。落葉宮には罪はないのだと作者は言いたいかもしれない。
- 【8】「齢積もらず軽らかなりしほどに、ほの好きたるかたに面馴れなましかば、かうひうひしうもおほえざらまし」(15~16)という夕霧の言葉は本音であろう。これからの物語は、真面目な中年男が、はじめて乱れる物語なのである。ということは、夕霧が髭黒になるということではないか。この巻のオリジナリティーはどこにあるのか。あるいは、オリジナリティーを消すのが作者の意図か。
- 【9】夕霧の乱れは、光源氏の教育への反乱である。夕霧が自己を確立する巻。
- 【10】夕霧は明確に、自分がこうしてお世話しているのは、御息所のためではなく貴

方故であることを落葉宮に言っている(16~17)。女房たちは「げに」と了解しているが、宮は困惑するばかり。彼女、朝顔がかつてそうしたように、この状況を自力で脱出できるであろうか。

【11】旅故、来ている女房たちの数は少ない。その女房たちも病気の御息所にかかりっきりで宮の許には「ひと少な」である。おまけに深い霧もたちこめて、夕霧を帰さない。状況は、宮にとって最悪である。宮には罪はないのである。→【7】。運命に翻弄される女。

【12】夕霧の荘園。栗栖野。こういうさりげない記述に夕霧の現在の政治的実力が示される。宮は決して不幸せになるのではない、という世俗的な発想も可能だ。

【13】広くもない旅の部屋に入り、宮を掴まえ思いのたけを述べる夕霧の行為は、今の官家の状況を考えれば、いかにも思慮にかける行為と言わねばなるまい。母御息所は重態で、宮はそれどころではない。時と場合を考えねばなるものもなるまいに。

【14】落葉宮の印象。「痩せ痩せにあえか」(22)。過去現在の苦勞が身についた印象である。

【15】掴まえた落葉宮に結局なにもしないところで、夕霧のイメージは艶黒を離れ、薫に近づくというべきであろう。ここで初めてこの巻のオリジナリティーが発揮される。→【8】

【16】落葉宮に夕霧が「世の中をむげにおぼし知らぬにしもあらじを」(23)と言うのも思慮にかける言葉である。このことについては、彼は彼女に「をりをりほのめか」(23)していたらしい。この発想、相当に彼女を傷つけたはずである。恋する女は、いつも初事であるという原則を彼は迂闊にも知らない。魚心あれば水心、「処女でもあるまいし」という発想は恋の品格を著しく落とし、官家の誇りを粉々にする言辞であろう。同じ言葉、将来、中君に対して薫が言う場面がある。いよいよ、この巻が中継の巻の印象をかもす。

【17】柏木との祝福された結婚が不調に終わった経験が、落葉宮を消極的にしている(25)。ましてや、この夕霧との結婚、踏み切るには軽薄すぎる。雲居雁は柏木の妹で、夕霧の正室。この結婚、おおよけになれば、光源氏と女三宮との近い例の通りの結果を生むこと、なきにしもあらず。その時、雲居雁は、紫上の運命を甘受することになる。そのあたりのイメージ形成を作者は読者に要求しているのかもしれない。

【18】「院にもいかに聞こしめし思ほされむ」(25)。朱雀院一統は悲劇の家系か。弘徽殿女御以来の仇役は一貫している。

【19】事に及ばず霧のなかを出てゆく夕霧。ならば、はじめから御簾をくぐらねばよかったのである。空蟬巻の時の光源氏の行為と比較して、夕霧の稚拙さ、配慮のいたるなさを思い知るべきであろう。彼は、「かやうのありきならひたまはぬ」(27)

男なのである。

【20】これまで落葉宮と御息所の関係は、「つゆ隔てずぞ思ひかは」(28)す仲であった。夕霧との一件は、水も漏らさぬ親子の仲を引き裂く結果をもたらすことになる。

【21】昔物語の効用、あるいは読書態度。物語の人物の行動態度でもって教訓を得る。これが、当時の一般的傾向である(28)。

【21】親にも秘密を隠す。そういう物語が当時あった(28)。源氏物語でいえば、光源氏、藤壺、女三宮、浮舟。源氏物語に即していえば、親に打ち明ける方がめずらしいというべきか。親子で悩むのは、特例にぞくする。作者がここで、こういう物語を構想したのは、恩愛を前面に出す意図からきているのではないか。

【22】阿闍梨の言葉「悪霊は執念きやうなれど、業障にまづはれたるはかなものなり」(30)。これ、案外作者の物怪認識なのかもしれない。

【23】夕霧の朝の振る舞いを、小康状態の御息所に注進する阿闍梨。彼の発想によれば、「大日如来虚言したまはず」(30)を自ら実行しているにすぎまいが、この言葉が、御息所の命を奪う導火線なのなどということは思慮の外なのである。彼の不用意な世俗性は、夕霧の思慮の無さと拮抗し、水も漏らさぬ親子の仲をひきちぎる結果となる。

【24】この阿闍梨の弟子たちも阿闍梨に負けず世俗的である。夕霧の行動を口々に師に注進している(31)。こういう世界で、御息所が救われるわけではない、と読者は思うだろう。

【25】阿闍梨の情報によれば、雲居雁は、七八人子供を産んでいるらしい。こういう発想も、この巻を世俗的日常的な世界にする結果をもたらす。物語的ではないのである。

【26】阿闍梨の力説。「女人のあしき身をうけ、長夜の闇にまどふは、ただかやうの罪によりてなむ、さるいみじき報いをも受くるものなる」(32)。「かやうの罪」とは愛欲のこと。源氏物語は「長夜の闇にまどふ」物語なのだということがこれで明確になる。この阿闍梨の観念、遠い昔、若紫巻北山僧都の言葉を引き継ぐ。この思念の遙かなたに宇治の大君、そして浮舟がいる。阿闍梨は宇治への道を開拓した人だと位置づけられようか。

【27】御息所にとっては実事があったかなかったか、ということはさほど問題ではない。皇女が思慮のない行為に及んだという点に問題の全てがある。彼女の誇りは著しく傷つけられたのである。

【28】「かばかりになりぬる高き人の、かくまでもすずろに人に見ゆるやうはあらじかし」(36)。落葉宮の認識。御息所と同じである。「名を朽」すこと、これが全てなのである。宇治八宮の発想に接続しよう。

【29】二三日振りの親子対面。御息所が昨夜のことを聞かぬところがあはれである。

- 【30】落葉宮の性質。「ものづつみをいたうしたまふ本性」(37)。この性格が、事態をいっそう深刻にする。
- 【31】親子の対面の場面に、夕霧からの手紙。間の悪いことは重なるものである。この巻の展開、非常に日常家庭的で、志が低い。作者はわざとやっていると思えない。
- 【32】御息所は言う。「人の御名をよさまに言ひなほす人は難きもの」(38)。一度たった噂を打ち消すのは容易なことではない。今も昔も同じ。
- 【33】夕霧の歌が、この御息所の発想を補強する内容であったという偶然がさらに事態を深刻化する。御息所は、こう言いつつも、その発想を打ち消す内容を期待していたのではないか。夕霧も夕霧である。御息所の目につく可能性もあるのだから、もっと優しい言い方はできなかったのか。山里は人が少ないという点への配慮がまるで欠けている点で光源氏とはだいぶ違う。場数を踏んでいない男の稚拙さであろう。
- 【34】落葉宮を召人あつかいにしかねない勢いの夕霧の手紙を読んだ御息所が、憤懣やるかたなく、夕霧を柏木以下の男だと考える。この時さらにこの巻の品位の低下は加速されたというべきである。
- 【35】御息所の手紙は、彼女が重態時に書いたもので、いうなれば遺言であろう。それなのに、一夜だけですませるとはなんだ、という怒りの歌になったのは、誇り高い御息所の末期の行為としては悲惨の極みである。彼女は、六条御息所に充分なれる、いやもうなっているというべきか。
- 【36】御息所は、夕霧と落葉宮との間に昨夜初夜の事があったという認識によって行動したわけだが、これは誤解以外なものでもない。夕霧が今夜来ないほうが正解なのであって、この点では夕霧に非はない。誤解が人を死に至らしめる話を作者は書こうとしている。理解されることのない世界を裏側からまづ衝く。という意図であろうか。
- 【37】御息所の手紙は夜中近くに夕霧の許に届く。三条殿にいて、近くに雲居雁もいる。文面が鳥の跡のような字で書かれていたから、判読に手間取った。明かりのもとで首をかしげていれば、雲居雁に見つかるのも、当然だろう。すでに落葉宮の宮の一件は承知していて、神経をとがらせているのだからその文だと思わぬわけがない。かくして、するすると這い寄って「うしろから取」(40)った。この場面、わざわざ真木柱巻に似せて作ってあると思う。あの時は、北の方がうしろから火取を投げた。嫉妬に狂った本妻が乱暴に及ぶ、という設定である。相手も同じく、これまで浮気ひとつしたことがないような真面目な中年男だ。真木柱にくらべるとこの巻のほうが理性的ではある。理性的であるぶん深刻になっていることも注意すべきである。
- 【38】夕霧は説く。雲居雁よ、「よろしうなりぬる男の、かくまがふかたなく、一つ

所を守らへて、もの懼ぢしたる鳥のせうやうのもののやうなるは。いかに人笑ふらむ」(41)。そして言う。なみいる妻たちのなかで一番尊敬され愛されていることこそ、本妻の面目ではないか。彼がこう言う時、光源氏の愛の世界が読者の脳裏を支配するだろう。そして、紫上の立派さ。それに憧れてやまぬ夕霧の心情を再確認することだろう。そこにこそ、この巻の眼目があるのではないか。

【39】雲居雁が反論する。彼女は言いたいのだ。「かねてよりならはしたまはで」(42)、いまさらなにさ。この時、読者は二人の筒井筒の恋の場面を想起し、残酷な年月に涙することだろう。そして、身につまされるかもしれない。この話この場面、いみじくも夕霧が断言したように、「世の常のこと」(41)なのである。日常の家庭劇のレベルに源氏物語は現在ある。

【40】夕霧が「緑の袖」(42)の一件を持ち出して、過去の傷に言及するのもお笑いである。ますます残酷な年月を強調するのみ。ただ、誤解の力だけ是不気味に後を引き、この巻の深刻さに参入してゆく。

【41】御息所の手紙を雲居雁から夕霧が「せめてもあさり取ら」なかった小さなミスが大きな結果を招くことになる。翌朝も、子供たちの喧騒のなかで空しく時が過ぎてゆく。夕霧が「異事もおぼえたまはず」(43)必死で捜索している姿も、虫の知らせめいて不気味である。

【42】昼、雲居雁に聞かすが、はぐらかされる。で、暮れ方になる。致命的な時間経過であろう。

【43】「ひぐらしの声」(45)。この甲高いカナカナカナという声が、事件逼迫を告げる。若菜下巻、光源氏が柏木の文を発見する場面の導入にもこの効果音を作者は使っている。あの時と同じ手法である。今回も手紙発見の前兆となっている。作者の意識的な行為だと思う。

【44】手紙を読んだ夕霧の「すべて泣きぬべきこち」(46)はけだし当然であろう。

【45】坎日。この配慮も裏目に出そうだ。なにもかにも夕霧にとって間が悪い。天中殺なのか。それにしても、非常時に平時の論理にこだわる真面目な男。はたから見れば笑劇なのだが、本人は必死。これも、読者ひとしなみに身に覚えのあることなのではないか。こうして、みんな大魚を逸する。

【46】この屈辱の24時間で、小野の御息所の病状が急変したのは当然である。この24時間の受け止め方が、落葉宮と御息所では全く違う。落葉宮もよく説明すべきであったのだが、「もの恥ぢしたまへる」(47)消極的な性格が災いとなってかかる事態を招いている。人の心が人の心に届かぬ物語。

【47】御息所の最後の言葉(48~49)。「心幼」い「人のもどき負ひたまふべき」ことをするな。「今よりは、なほさる心したまへ」(48)。この言葉は、これからしばらく展開される、落葉宮とも思われぬ強情な抵抗によって立つ精神的基盤となる。彼女は、「こよう情けなき人の御心」を恨んで死んだ母のために戦ったのである。

世を恨んで死んだ父のために生きた宇治大君の、これは先取りであろう。

【48】瀕死の御息所は、夕霧の使者が文を持ってきたことを知り、今宵も夕霧が来ぬことを察知して死ぬ。彼女は怨霊となって不思議はないような死に方である。誤解は解かれぬまま、人を一人死に追いやったことになる。残酷な物語。源氏物語は、こうして人を決して待ってはくれぬ時間の恐怖に触れた。

【49】朱雀院からの弔文。これのみを見る落葉宮(51～52)。朱雀院一統の悲劇性は源氏物語で一貫している。この物語もその系譜中のものである。弘徽殿太后を頂点とする反光源氏派の悲惨な末路として位置づけるべきであろうか。これは、宇治八宮一族の悲劇へと連続する物語である。→【18】

【50】葬儀の事務を取り仕切っている「御甥の大和の守」(52)。この設定、遠く手習巻、ちらりと出てくる大和守を意識していると思う。

【51】夕霧のわざわざの来訪(52～55)。今は空しい限り。しかし、葬儀全般の手配はきちんとして帰っている。こういう実務的なことになると非常に夕霧が生き生きとしてくるのは皮肉である。光源氏の教育の賜物であろうか。

【52】「九月になりぬ」(56)。御息所が亡くなったのは、八月中旬であるから、約半月落葉宮は小野で喪に服していることになる。

【53】夕霧の回想(57～58)。大宮死亡時に照らして彼は行動している。心をこめて後のわざをいとなむことが、遺族の心を打つ。今回落葉宮がそうならぬのが不思議である。と思うということは、彼は落葉宮の心をその程度にしか理解していないということである。

【54】夕霧が柏木と親交をむすんだのは、大宮死亡の時。彼が夕霧の考えるように振る舞っていたからだ。ここで、こういう事実を書いた作者の心情はどういうことであろうか。柏木と夕霧との同一化。落葉宮は、決して柏木との結婚生活に満足していたわけではない。それと同じ結婚生活が、再び彼女を待ち受けているという予告であろうか。ならば、彼女の拒否の、これは暗黙の支持であろう。

【55】雲居雁の歌。「あるや恋しき亡きや悲しき」(58)は、夕霧が思ったように、なにをいまさらの、露骨な厭味をたたえた歌である。こうして、古女房は嫌われてゆく。紫上の振る舞いと比較してみると夕霧の不満がよく理解されよう。雲居雁も、こういう場数を踏んでいないから、夕霧の恋のように下手なのである。よく似た夫婦。

【56】実事があったという前提で、夕霧の不実を責めた御息所の最期の手紙を世間的なテコにして、落葉宮を自分のものとしようという夕霧の魂胆(59)。これでは御息所も浮かばれまい。かわいそうなのは一人残された落葉宮である。

【57】夕霧の小野再訪は「九月十余日」(59)。御息所の死から約一ヶ月後のことである。

【58】夕日を眩しそうに扇でさえぎる夕霧(60)。珍しい描写である。

【59】「大和の守の妹」(61) 少将の君に語る夕霧。落葉宮に伝えてほしい。「よろづのこと、さるべきにこそ。世にあり経じとおぼすとも、従はぬ世なり」(62)。この言葉、源氏物語最後の場面、薫が浮舟に言うであろう台詞ではないか。ということは、この巻は、夢の浮橋の実質的統編ということになる。先に続きを書いておいて、作者は続きを書かなかったのである。大和守をここで出した意味は、そのサインではないのか。

【60】雲居雁の思い(64)。六条院賛嘆と二心なき夫婦生活とが記されている。この二つは矛盾するもので、いずれか一つしか選択の余地はない。夕霧は、この期に及んで六条院をとったのである。雲居雁に紫上になれと要求しているのである。ちょうど、柏木が落葉宮に、女三宮を期待したように。

【61】雲居雁のところで、落葉宮に手紙を書く夕霧(65～66)。現実の力が、雲居雁の抵抗を排除した趣。くるところまできてしまったら、いかんともしがたい。夕霧も恋の道に迷い、理性を失っている(66)。

【62】光源氏の思い。「宿世といふもの、のがれわびぬることなり、ともかくも口入るべきことならず」(67)。光源氏に忠告を断念させたところに、現在の夕霧の政治的实力があるというべきか。

【63】光源氏は自分が亡くなった後の不安を紫上に語る。これで、紫上が光源氏より先に死ぬことはなくなったというべきであろう。読者がそれを許すはずがない。作者もそうかもしれない。とすると、この落葉宮物語は、紫上の死の前座ということになる。落葉宮の運命を免れさせることでもって紫上へのはなむけとするという路線である。

【64】紫上の述懐(67～68)。源氏物語で唯一本音を語った部分というべきか。「女ばかり、身をもてなすさまも所狭う、あはれなるべきものはなし」と誰であろう彼女が言う時、平安王朝女性の運命の閉塞状況はここに極まるというべきであろう。紫上という形、彼女の方向での女性の幸せは、結局ありえないのだと作者は宣言しているのではないかと思う。無言太子のように「あしきことよきことを思ひ知りながら埋もれなむもいふかひなし」という認識。これは、そのまま作者の認識であろう。だから、紫式部は源氏物語を書いた。源氏物語のなかで、紫式部は無言太子から富楼那になったのだ。

【65】「今はただ女一の宮の御ため」(68)。孫の世話をやく紫上。彼女の生涯がほとんど終わっていることを示す条文。

【66】夕霧と対面して、いったんは助言を試みようとして、結局止める光源氏(68～70)。完全な世代交代の印象は否めない。光源氏の人生もほとんど終わっているのである。

【68】致仕の大臣家でもこの件、知ることとなる。宮の方が悪く思われるのはいたしかたないところだろう。

- 【69】朱雀院もこの件を知る。が、出家を許さずというばかりで、夕霧との問題には、一言も口をはさもうとはしない（70～71）。大和守は、夕霧の配下のもののごとくで、落葉宮はまったく四面楚歌の状態に追い込まれている。
- 【70】夕霧は、この結婚を御息所の承諾済みという恰好で決着をつけようとする。死人に口なしで、ひどいやりかたではあるけれど、結果的には、これが落葉宮の幸せになるのかもしれない。夕霧はそう確信して、強引露骨に行動しているのであろう。落葉宮の誇りは、この際思慮の外である。
- 【71】落葉宮は、御息所の四十九日間小野の地にいたことになる。
- 【72】自分の髪をみて「いみじのおとろへや」（73）と思う落葉宮。彼女が夕霧との結婚に踏み出せない心理の奥には、容貌への自信の無さがあるのは事実である。
- 【73】「浦島の子がここち」（75）。御息所遺愛の経筈をもち一条宮へ帰る落葉宮の感想である。紫式部が、浦島伝説を良く知っていた証拠となる条文。
- 【74】一条宮で主人然として落葉宮の帰りを待っている夕霧（75～76）。まったく図々しい限りだが、世間の誤解をうまく利用した狡猾な政治的遣り口である（76）。
- 【75】ともかく落葉宮は、塗籠にこもって帰邸第一夜を明かし、夕霧を避けた（77～78）。意地を通したというべきか。もはやこれまでであろうが、こんなことで、一応の面目は立ったともいうべきか。
- 【76】六条院に帰ってきた夕霧に花散里が、率直に聞く。夕霧も素直に応えている。実質的な母と子の対話である。御息所の遺言（79）という嘘もまじえているが、この件は譲れないところなのであろう。夕霧は、花散里にこうして語っておけば、自分の考えが光源氏に伝わると考えている。父を思う優しさもそこはかたなく感じられる条である。このあたり、いかにもホームドラマ的展開。
- 【77】花散里の登場する場面はかなり長い（78～81）。夕霧の許で幸せな晩年をすごしていることを読者に示し、これをもって彼女の終章としようということか。
- 【78】雲居雁のことを心配する花散里に、「鬼しうはべるさがなもの」（80）という夕霧。もちろん冗談だが、このイメージ、後で生きる。→【83】
- 【79】「なほ南の御殿の御心もちるこそ、さまざまにありがたう」（80）紫上は夕霧にとって絶対的存在である。この巻が、紫上に絡む話であることの暗示。将来、紫上が落葉宮となるイメージを読者は、この時持つのではないか。このイメージは、晩年の空蟬、そしてなによりも藤壺の映像によって補強される。→【63】
- 【80】夕霧は、理想の人として、もう一人、目の前の花散里をあげる。これは、なによりも花散里へのはなむけであろう。彼女も紫上同様、養子の教育に成功したのである。さぞや満足であったろうと推量される。
- 【81】光源氏が自分のことは棚にあげて、息子夕霧の行動を批判するのは「さかしだつ人の、おのが上知らぬやうにおぼえはべれ」（81）と言って夕霧を励ます花散里。これも彼女の満足感が言わせた台詞。

【82】夕霧を見て、その美しさに、日頃の行為を納得する光源氏の寸描がある（80～81）。彼にはもう忠告しようという気はさらさらない。孫に目を細める好々爺みたいになっている。光源氏の人生もまた完全にたそがれている。

【83】三条殿での、夕霧と雲居雁の夫婦喧嘩（82～85）は面白い。家庭劇としてのこの巻の面目躍如たるものがある。「御心こそ、鬼よりけにもおはすれ、さまは憎げもなければ、えうとみ果つまじ」（82）「何ぞと言ふぞ。おいらかに死にたまひね。まろも死なむ。見れば憎し。聞けば愛敬なし。見捨てて死なむはうしろめたし」（83）。愛を失わぬ喧嘩は笑える。犬も食わないのは、こういうものか。

【84】夕霧は、少女巻以来、耐えがたきを耐え貴方ひとすじに生きてきた過去を語る。この話には、さすがの雲居雁も弱いとみえる。遠く雨夜の品定めが思い出される。「心はうつろふかたありとも、見そめし心ざしいとほしく思はば、さるかたのよすがに思ひてもありぬべきに」（帚木巻58）。

【85】夕霧が出掛ける時に言った雲居雁の言葉「なほうつし人にては、え過ぐすまじかりけり」（85）は、自分はいつでも髭黒大将元北方になれる、という文脈で理解するのが正しいと思う。

【86】まだ塗籠に籠城している落葉宮も異常な風景である。喪のあけるまで、つまり一年間こうしていたいというのだからまさに異常。

【87】落葉宮の宮の名誉のために、という皮肉な論理で、夕霧は少少将君を説得し、塗籠に入る（87）。結局は、こうして、落葉宮の誇りはずたずたにされながら結果的には保存されることとなる。塗籠のなかで夕霧は言う。「ただかかる心ざしを深き淵になすらへたまで、捨てつ身とおぼしなせ」（88）。いい台詞ではないか。

【88】塗籠の内部に置かれた家具の描写（89）。その時の落葉宮の抵抗を想像させてリアルである。

【89】翌朝、薄明のなかで、お互い初めて見合う場面（89～90）は哀切。柏木より格段に麗しい夕霧に、自分の不器量を思って悲観する落葉宮。柏木は常々お前はブスだといっていたのである。あの頃よりもっと自分は衰えていると考える落葉宮の心情はやるせないかぎり。→【72】

【90】「まめ人の心変るは名残なく」（91）。当時の諺か。

【91】雲居雁が子供をつれて実家に帰る場面（91～92）。夕霧が迎えにゆき空しく帰る場面（92～94）。この二つの場面でもって、この巻が、真木柱巻と対になっているのだということが了解される。夕霧一髭黒、雲居雁一元北方、落葉宮一玉鬘。という対応関係がここに明瞭となる。この二つの対応関係は似ているというレベルではなく、明らかに似せているのであって、作為の露骨にうかがわれる強固な対応関係である。そして、この二つの巻のちょうど中間点に巨大な若菜巻があり、光源氏一紫上一女三宮の三角関係が配置されている。これをどう解釈するか。となれば、その位置からみて、若菜巻の三角関係は、ちょうど「やじろべえ」のようにバランスさ

れた強固な対応関係からせめぎあげられて、この二つの巻のそれぞれの三角関係の強烈な逆照射を浴びる。そして、否応なしに新たな意味を付与される。されざるをえない。という構造的仕掛けであると、この作為を私は考える。私がなにを言おうとしているのか分かっていただけるだろうか。女三宮問題を乗り切った紫上の行為は、柏木の乱入という僥倖にたすけられたものに過ぎず、その内実は、雲居雁および髭黒元北方と同じであったという事実の確認を、作者が読者に迫る仕掛けである。これを、作者は書かずに書いた。いうなれば、構造で書いたのである。これは、紫上の僥倖がたんなる僥倖にすぎないという冷たい認識である。そして、その時こそ、この巻のト真ん中に置かれた紫上の述懐「女ばかり、身をもてなすさまも所狭う、あはれなるべきものはなし」(→【64】)がすさまじい意味をもって浮上する時なのである。ここで作者は、源氏物語のヒロイン紫上を描ききったというべきであろう。要するに、この巻は、紫上を要約する巻なのである。彼女に残されたテーマは何か。彼女が、落葉宮になるかどうか。この一点しかない。もしならなかったら、多分そうなるだろうが、この巻はヒロイン紫上への巨大なはなむけの巻となる。忘れてもらっては困るが、次の巻は紫上が死ぬ巻である。

【92】恋の道で苦勞する夕霧の感想。「いかなる人、かうようなることをかしうおぼゆるむ、など、物慾しぬべうおぼえたまふ」(93)。彼は物語の主人公にはむかない。フツーのオジサンなのだ。→【1】

【93】子供たちに、お母ちゃんのようになっちゃいけないと諭す父。ありそうな話である。

【94】厭味な歌を落葉宮に贈る致仕の大臣。彼も相変わずである。

【95】雲居雁に同情して歌を贈る(96~97)典侍は、どこか『蜻蛉日記』の作者めいて面白い。

【96】最後に夕霧の十二人の子供たちの紹介があるところ、いかにも家庭劇のこの巻らしい。律義ものの子沢山を地で行っている。雲居雁も典侍も落葉宮もそれぞれ不満をもちつつ現実と妥協し、なんとかやってゆくだろうという終わり方である。

【97】花散里は、孫の世話までやいている。「かばかりの宿世」を処世訓とする彼女の勝利といえないか。

(注) 源氏物語本文は、新潮古典集成『源氏物語』(六)に依っている。括弧内数字はその該当箇所である。